

東方心象記

AKIRA@お豆腐メンタル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

士郎に伝えたいことを伝えた後

元の世界に戻ったセイバーだったが

そこで再びマーリンに出会い幻想郷に

飛ばされてしまう。

そして士郎はその後、日課の鍛練を怠らず、

いつか出会えるかもしれないセイバーに近づこうと努力をしていた。

この物語にはご都合主義な部分が含まれます。

それと fate と東方Project のクロスオーバー作品となります。

全くの初心者なので描写が下手です (´・ω・´)

なので随時修正して行きます (p・ω・q)

fate と東方Project も原作を詳しく知らないので調べつつ書いていこう
と思いますが、おかしな点がありましたら教えてください m (´|`|´) m

※作者のメンタルはお豆腐です

物語の構成としては、セイバーと士郎のダブル主人公でお送りいたしたいと思いま
す。

物語の基本としてはセイバー√の後ではありますが、

士郎の心情、ステータスについてはご都合主義が働いておりますので色々な√が重
なつていたりします。

※あらすじと説明文を入れ替えさせてもらいました。

タグは、もしかするとこれから増えるかも知れません。なるべく増やさないようにし
たいと思います。

残酷な描写は今後予定。

(シリアス) 5:(ほのぼの) 4:(ギャグ) 1で書いていけたらなと思います。

1/26:御指摘により原作崩壊タグ追加。

あまりにもおかしい原作崩壊の場合は御指摘頂けると有難いです。なるべく直したいと思います。

感想や評価お待ちしております。

目次

プロローグのようなもの	1
交差する二人	
第一話 別れと新たな出会い	10
第二話 運命の夜	15
第三話 実力	24
第四話 意思の確認 1	36
第五話 意思の確認 2	40
第六話 博麗神社にて	55
士郎さんのステータス	67
第七話 紅魔館での出来事	72
第八話 紅魔館は今日も平和	95

プロローグのようなもの

「最後に一つだけ…伝えないと」

髪の解けた彼女が振り返り

「土郎…貴方を愛している」

そして彼女は日の出の眩しきとともに消えた。

「来てもらって悪いね」

男は、どこからともなく現れた女性に詫びを入れた。女性は、少し不貞腐れている様な顔でこちらを見ている。

「いいえ、構わないわよ？」

「それよりどうして私を呼んだのかしら？」

この男は、一体何の用で自分を呼んだのだろうか。きつと、ろくでもないことに違いない。

そんなことを思っていると、男はそんな彼女の気持ちが分かったのかすぐに説明し出した。

「これから、ある少女を君の世界に連れて行ってほしいんだ」

こつちの世界より楽しいだろうしね。と小さく言った。それを聞いた女性はまるで新しいおもちゃの値踏みをするかのような表情に切り替わった。

どうやら彼女の興味を引くに成功したらしい。

「ふうん？で、その少女と言うのは一体誰なのかしら？」

そんなこと、言わずとも分かるが一応聞きますわよ？と言うような口の聞き方だ。

「知っているくせに、アーサー王だよ」

目の前の女性はアーサー王が女の子だったということを知っても驚いた様子はない。

彼女は表情を変えることなく男の話聞いた。

「ほら、驚かない…」

「あの子はね、もう王としてではなく一人の少女として生きてもいいんじゃない

かと思つてね」

「あの子は、第五次の聖杯戦争で、一人の少年と出会い、答えを出したみたいなんだ」

「そしてその少年を愛した様だ：生きた時代のどうにも変えられない時間の差を、どうにかしなくてはならない」

本来は交わることの無いはずの二人は恋に落ちた、だが少女は元いた世界に帰らなくてはならない。

二人が再び出会うには待つ側、追う側の、二人の奇跡が起きないことにはどうにもならない。

「だからボクはね、新しい場所で、新しい人生を歩み、その少年を待つ間、退屈して欲しくない。そう思つたんだよ」

「だがボクは此処から出ることは叶わない。だから君に頼つた。君の能力なら【時の境界】を越える事だつてできるはずだからね」

この女性の能力はあらゆる境界を操ることが出来る。【時の境界】も当然当てはまる。

だが、時の境界を弄るのは、それ程何度も行使していい様なものではない。世界を壊す恐れがあるからだ。

だから、本来はどんな小さな時の時間旅行でさえ、世界に感知され、抑止力が働き、容易に元の時間の進み方に戻してしまう。その所、この女性の能力は感知されない。

何千何億もの時間は流れているが、この女性の力は小さな特異点を起こそうとも感知されるような事は無い。その事をこの男は知っているようだ。

そして、今まで黙って聴いていた女性は口を開いた。

「私の知っているあなたの性格とは、随分違いがあるようなのだけれど？」

その男の性格を指摘され苦笑しつつ男は答えた。

「ボクにだって人並みの感情や感性などあるさ…まあ、ズレてはいるけどね」

それを流すかのようにして女性は言う。

「私の能力は時間に由来する者じゃないんだけどね」

男は、イタズラっ子のような無邪気な笑顔にも見えるが、少し不気味な表情で応える。

「なあに、あらゆる境界を操れるなら「時の境界」だって操れるだろ？」

心底呆れた顔で女性は喋る。

「はあ、貴方には何を隠しても無駄なようね」

「ええ、分かったわ。だけど一ついいかしら？」

「ああ、なんだい？」

男は、何でも言っついていいよ？と言う顔だ。

この男のペースに乗せられているようで癪だが。

「あの少年がどうなるか、興味があるのよ。だから少し遊ばせてもらおうわよ？」

そんな事かい？とでも言いたげに男は言う。

「ああ、構わないさ」

すると男の前に立っていた女性は、空間に穴を開け、その中に姿を消していった。

木漏れ日の指す気持ちが良い森の中で一人の騎士が、王様を馬から下ろし、木にもたれさせる。

「ベディヴィエール」

するとベディヴィエールという騎士は驚きつつ王に応えた。

「つ?!…王よ、気が付かれましたか?!」

「うむ、永い夢を観ていたようだ」

「夢…ですか？」

「ああ……あまり見ないからな、貴重な体験をした」

すると王様は、騎士にとって答えにくい質問をした。

「なあ、ベディヴィエールよ、夢の続きを……また、観る事は出来るだろうか？」

その騎士は、一度苦い顔したが明るい口調で喋る。

あたかも本当にそうであるかのように。

「っ?!…はい、私にも経験があります。強く願えば、きつとまた」

「そうか、そなたは博識なのだな」

優しい表情だった王様は、真剣な眼差しに変わりこう言う。

「ベディヴィエールよ。我が剣を持って」

「っ?!」

王様は騎士に説明をする。

「よいか、この森を越え、あの血塗られた丘を越えるのだ。その先にある湖に、剣を投げ入れよ」

騎士はその説明で理解したのだ。王である証の聖剣を返還するその真意を。

騎士は、その王様からの、恐らくは最後の命令を全うするべく馬を走らせた。

そして王様はいましたが馬を駆ける騎士に届かぬ言葉を贈る。

——ベディヴィエールよ、胸を張るがよい……そなたは、王の命を守った、のだから

「今度の、眠りは、永く……」

そして王様^{少女}は静かに安らかな顔をして目を閉じた。

騎士は湖に剣を投げ入れたことを伝えるべく王様の前へと急ぎ戻った。

だが、騎士は目を瞑る王様を眼にし、全てを悟ったのだった。

そして、騎士ベディヴィエールは想う。

王よ。剣は、確かに。確かに、湖の婦人の手に。どうか安らかにお休み下さ

い

そしてベディヴィエールは、小さく呟いた。

「——王よ。見ているのですか？夢の続きを……」

ベディヴィエールは最後に少女へと戻った王様へ、そうなるよう願うのだった

王様^{少女}が目を閉じてから数分後……

暗闇の中から、1人の男が現れたのだ。

真つ白なローブをその身に纏い、一本の立派な杖を携えた男は、こう言った。

「どうやら君は、今回の聖杯戦争で答えは得たようだね」

「なら、ボクからは何も言うことは無いよ」

その男は、どこか安心した様子だった。

「——アルトリア、君はもう、自由にしたらいい」

「今までお疲れ様、もう、王としてではなく一人の少女として生きてくれ」

するとその男は、その手に持っていた杖を振りかざした。すると白い一つの光が杖の先で眩しく光る。

「新しい人生に、ここちちに帰ってからの記憶、今この場での記憶は必要ない。だから、消してもいいね？」

——っ?!、マージン! 貴方は結局、なにが言いたいのですか?! ——

「これから、第二の人生を少女として生活してほしい、ある場所です」

本当は奇跡に等しいんだよ? というような声が聞こえたが、それどころではな

その男の最後の言葉を聞いた少女は、更に深い、深い暗闇の中でねむりについ

いた。

——アルトリア。君の第二の人生に、幸あらんことを——

交差する二人

第一話 別れと新たな出会い

「今日も天気の良い気持ちのいい日ね」

西日の入ってくる窓際で外を見つめながら、そんなことを呟き、いつもの様に自分の家の周りの花畑の手入れに向かおうとしていた。

「さて、日傘を持って、戸締りをして準備完了ね♪」

昔は、人間やほかの妖怪などに「弱いものイジメ」をするのが好きであった。

そんな訳で危険度は極高で友好度は最悪となっている。

触らぬ神に祟りなしと言うほどの大妖怪だったのだが今ではちよくちよく博麗神社に立ち寄ったり村ではフラワーショップを経営していた。

これから花畑の手入れが終われば博麗神社に立ち寄り、少し話をしたら村のフラワーショップに行く予定だったのだ。

どういふ訳か昔のようなオーラは無くなり、今では温厚な面倒見のいいお姉さんになつていた。

ある噂では、一度博麗の巫女に退治されて改心したと言われているが、本当のところ

はイジメなどよりも他の人達との生活が楽しくなってきたのだった。

「なんだが新しい出会いの予感？」

そんなどこかの少女漫画のような展開はないだろうと、この時は思っていたのだがこの時の私はこの後起こる出来事を想像もしなかったのだった。

(何故でしょうか…)

(一向に元の世界に戻る感じがしません…)

自分は一体どこにいるのだろう。

「涼しい風が通っていて気持ちいいですね」

なぜ喋れるのだ？

目を開き辺りを確認してみる。

だんだん眩しさに目が慣れてきた。

そこは先程いた柳洞寺ではなく、太陽の光が良く当たるひまわり畑だったのだ。

「ここはどこなのでしょう。あたり一面ひまわり畑のようですが…」

確か、今回の聖杯戦争で聖杯を壊した。

だからもう二度と聖杯戦争は起きないはず、それにあの時、令呪の最後の一面が消え、あの場所から確かに消えたのだがどうということだろう。

「あら?…また誰か私の花畑を荒らしに来たのかしら?」

(誰かに出会う予感はしてたけど本当に出会うとはね)

そこに、先程までは居なかったハズの誰かがいきなり現れ、軽く身構えた。

緑色の綺麗な髪で、印象的な日傘をしている女性が現れたのだ。

「そんなに身構える必要は無いわ」

「いきなり現われて身構えるという方がおかしいと思うのですが…」

「まあそれもそうね。私は風見幽香。ここの花畑の管理人よ。幽香と呼んでちょうだい」

「そう言えば貴女、ここらでは見かけない顔ね、外人つてやつかしら?」

「私はセイバーというものです」

「もちろん真名ではありませんが、今はそう呼んで頂きたい」

「ところで…その外人人とは何のことでしょうか、それにここはどこなのですか?」

「では、二つ目の質問から答えるとするわ」

「ここは、幻想郷と呼ばれる場所で、外来人というのは外の世界……つまりは別の世界の住人を指す言葉ね」

「詳しい話は……」

（幻想郷……私の持っていたエクスカリバーの鞘、全て遠き理想郷ア ヴァ ロと関係しているのでしょうか……）

「ん？どうかした？」

「え？……あ、いえ少し考え事をしていました」

「？……これからのことなら、まずは博麗神社という場所の博麗霊夢という巫女と詳しく話をした方がいいわね」

「いいわ、私もそこに用があるからついでに案内してあげる」

「よろしいのですか？」

「ええ、いいわよ。それにさつきから貴女にはただならぬ何かを感じるのよ」

不敵な笑みでこちらの心を探るかのような顔をしている。気を少しでも緩めてしまえば完璧に相手のペースに持っていかれそうな雰囲気だ。

「……ただならぬ……何か、ですか？」

「ええそうね、あなたの実力が少し気になるの」

「博麗神社で手合わせ願えるかしら？そこでなら彼女も結界を張ってくれて周りに被害が及ぶこともないから」

彼女は自分の実力が気になると言った。

だが自分自身はあの戦いで答えを得ることが出来た。だからもう、本気で自分の実力を発揮する場所など来ないと思っていた。それに自分はあまり戦いを好むほうではない。

だからと言って道案内など、幻想郷ここに來てからの情報を色々教えて貰った幽香という彼女の頼みを断ることなど出来ない。

少女は渋々その頼みに了承した。

「あまり気は進みませんが分かりました。私の実力を存分にお見せいたしましたよう」
この時、少女はあることに気が付けなかったのだった。

第二話 運命の夜

少年は夢を見た。

「土郎……貴方を愛している」

最近あの時の夢を見る事が多くなった、これは自分があの時のことを忘れてはいかないから何度も見続けているのだ、きつとそうだ。

昨晩はいつもの鍛練の後眠ってしまったようだ。

「……ん」

「もう朝か」

朝ごはんの準備をしなくては、もうそろそろ6時半だ7時半にはいつものように藤ねえが朝ごはんを食べに来る頃だ。

あの金髪の彼女が居なくなつてから数カ月が過ぎた。あれから鍛練は1日も欠かしていない。

イリヤはというと、あの後藤ねえの家でお世話になった。何でも、男の俺と二人暮ら

しするのは心配らしい。そんな、間違いを起こすわけ無いが…。

藤ねえはいつも「セイバーさんはいつ帰ってくるの？早く帰ってきてるといいわね…」
と言ってくる。

俺は彼女が居ない生活にはもう慣れたつもりでいたが、やはり愛した彼女のことを忘れることは出来ないようだ。

いつものように顔を洗い、作業着から着替え、朝ご飯の準備をする。

今日は、白菜やしめじ等が入った味噌汁に鮭の塩焼きそれと炊きたてのご飯だ。

準備を終えた頃。

玄関の扉の開閉音と共に一人の女性が滑り込みで部屋へ入ってきた。藤ねえだ。

「土郎〜！」

「おつはよ〜！今日のおかずは味噌汁と鮭の塩焼きかなあ〜？」

なんでさ。

いつも思うが藤ねえは、匂いだけで大抵のご飯の内容を言い当ててしまう。

以前理由を聞いてみたのだが「匂いで何となく分かるのよね」とのことだ。

藤ねえの嗅覚恐るべし…

食事を終えたと思つたら騒がしく学校に出勤していった。

「あ！もうこんな時間！士郎ごちそうさまー！今日も美味しかったわよ！」

「お粗末様です」

「じゃあ行つてきまーす！」

今日も慌ただしく出かけて行つた。

「気を付けてな！」

聞こえたのだろうか。あの冬木の虎の事だ恐らく心配は要らないだろう。

そろそろ自分も準備をしなくては学校に遅刻してしまう。

準備が終わり戸締りをした。

そして留守番をしているはずもない誰かに向けて言う。

「行つてきます…」

と、家の門を出ようとした時何かを感じた。

それは、そうあの聖杯戦争の時のライダーの結界のようなものを感じた。

いや、そんなはずはない。

あの時完全に聖杯を壊し、もう二度と聖杯戦争なんて起きないはずだ。もうあんな馬鹿げた戦いなんて起きない方がいい。

俺は、気のせいだと思うことにし学校に向かった。

その時、不敵な笑みのような妖艶な微笑みのような、そんな表情の女性が、士郎のこ

とを見ていることに士郎は気が付かなかつた。

午前中の授業も終わり、昼休みになった。

「一成……これで全部か？」

「ああ……いつも悪いな衛宮」

「いいや、いいんだよやりたくてやっている事なんだから、それにこれは俺にとつては修行みたいなものだし」

「修行？……まあ、だがな衛宮 俺としてはお前が心配でならんのだ」

「ん？……俺が？」

「ああ……いくら何でも人助けに見境が無さ過ぎるであろう。いつか倒れてしまわんかと心配なのだ」

「まあ俺も頼ってしまっているのだからあまり強くは言えんのだがな」

「そこまで見境がないことは無いさ。きちんと気をつけているよ」

「それならいいのだがな」

一成は俺のことを心配してくれているようだ、あんまり心配をかけたくもないがこればかりはどうにもならないんだ、すまないな。

ここ、稲穂原では衛宮士郎は機械の修理や頼まれ事をすべて引き受けていることから

「稲穂原のブラウニー」、「ばかスパナ」等と呼ばれている。

我ながらいくらなんでも失礼だろうと思う。

いつもと変わらないやり取りを終えると午後の授業にむけて教室の戻った。

今朝出かける時のあの感覚のせいで、午後の授業はあまり身が入らなかった。

「今日は早く帰るとしよう……」

やはり気になる。

なぜ今朝になってアレを感じたのか、あれはライダーのものではなかったが何かしらの結界である気がした。

午後の授業も終え帰宅した。

家の門を入る時、やはり感じた。今朝感じたものよりさらに強くなっていた。

俺は1番強く感じる土蔵の前まで行った。

恐る恐る扉の前に立ち心の準備をした。

自分の危機察知能力が教えてくる。

ここから先は本当に危険だと、でも行かなくてはならない。

よし

トレース・オン
「投影・開始」

あの赤い街頭の男も使用していた黒と白を基調とした夫妻剣。

干将莫耶を投影した。

トレース・オフ
「投影・完了」

心の準備も戦う準備も出来た。

後は扉を開け……る、だけ？

何故だ、何故触れてもいない扉が開いている。

中から金髪で紫を基調とした服が特徴的な妖艶な女性が暗闇から現れたのだ。

「貴方、変わった力を持っているのね」

「お前は誰だ？」

「では、自己紹介からしましょうか 私は、八雲紫……初めまして、衛宮士郎」

「!？」

どこかで会ったか？ なぜ自分の名前を知っている？

いや、この女性とは会ったこともない、あったことがあるなら覚えていないはずがない。

八雲紫と名乗った女性はいつの間にか後ろにいた。

いつの間にも移動した？　目をそらしたつもりは無い、いきなり消えたのだそして

後ろにいた。

警戒しつつ振り返り気になっていたあの結界のことを聞いた。

「あの結界はお前が仕掛けたのか？　それになぜ俺のことを知っている？」

「あら？　あなた結界のことが分かるの？　これはね人払いの結界なの今から

貴方に来てもらいたいところがあるから邪魔が入らないようにするためにね」

「それと私はね色々な事を知っているのよ？　貴方が普通とは違う力をもっている

こと、目指しているんでしょう？　【正義の味方】ってやつを」

「!？」

こいつは俺のことをどこまで知っているのだろうか、平静を保っているふりな顔をし

つつ言った。

「俺は何故だか結界とかがある場所に気付きやすいんだ、物知りなくせにそんなことも

知らないんだな　それに今なんて言った？　来てほしい？　拐いに来たの間違い

じゃなく？」

彼女は、一本取られたことに一瞬顔を苦くしたがすぐに戻った。

「っ…拐いに来た…ねえ　あながち間違っていないわね。でもねこの世界より私達の世界

の方が多分「正義の味方」に本当の意味でなれると思うわよ?」

「貴方の世界は限りなく広くて大勢を救う為には少数を切り捨てなくてはならないでしょう?」

私達の世界ではその必要が無いのよ?」

少し考えてしまった、大勢を救うため少数を切り捨てるなんてことしたくない。だがそれでも自分を犠牲にすることでこの世界の人が救えるなら、その人達の笑顔が見られるなら。それで構わないし理想を諦めるなんて出来ない。

「いや無理だな行けない俺はその世界で「正義の味方」になつてしまえばこの世界はどうなる?」

救えなくなつてしまうだろ?」

「理想に裏切られ、信じた友にまで裏切られる事になつても?」

「ああ…例え理想に裏切られ、信じた友にまで裏切られようと俺は後悔だけはしない」

「貴方…壊れているわね」

寂しそうな表情をし誰にも聞こえないであろう声でそう呟いた。

「そう…ところで貴方の能力。世界に影響を及ぼす程の力こつちの世界の呼び方風にする」と【心象を具現化させる程度の能力】とでも名付けましょうか」

「は?」 何のことだ?」

俺は行かないと言つたはずだぞ?」

「ええ、だから無理矢理にでも連れて行く事にしたわ」

「え?…」

何を言っているんだ?

と、言葉にしようとする間もなく

地面が消えた

「うわああああ…」

俺は暗闇に吸い込まれるようにしてその場から消えた。

一人残された金髪の女性は、満月に照らされていることも相まって強調された妖艶な微笑を浮かべていた。

そして、

一言呟いた。

「ようこそ幻想郷へ 私達は貴方を歓迎するわ 衛宮士郎」

と、そして彼女は再び暗闇に姿を消した。

第三話 実力

ひまわり畑から少し進んだ所で、一人の少女に出会った。

「おい、そこの金髪！」

「初めてみるな！この幻想郷最強のアタイと勝負しろ！」

この少女は何を言っているのだろうか。見た目は十にも満たない子供である。髪は、水色。頭部には、青い大きなリボン。首元には赤いリボンが巻かれ、背中には氷の塊のようなもの羽？が六つ付いていた。

「あの、「あら？チルノじゃない。こんな所で何をしているのかしら？」

「ヒイ!？」

ユウカを見た途端怯えだしたチルノという少女。

ユウカに、何をしたのかは知らないが…ああ、あの花畑をどうかしたのだろう。先程、花畑を荒らしに来たの？と、聞かれたし。チルノ…可哀想に、ユウカの実力を知っているわけではないがそう思わざるを得なかった。

そしてそこにまた、一人の少女がやって来た。

「チルノちゃん!?!何をしてるの!?!」

今度は、先程のチルノという少女と身長は似通っているが、少し高い。髪は、薄緑色。左頭部(こちらから見れば右)に黄色いリボンでサイドポニーを作っている。首元には、黄色いリボンを巻き、背中には、いかにも妖精と言うような羽があった。

「大ちゃん、すいません。幽香さん、チルノちゃんがまたご迷惑をおかけしましたか?」

「いえ、今日はまだ何もしてないわ。別にあなたが謝ることじゃないわよ」

「では、これで。さようなら、幽香さん」

「ええ、じゃあね」

緑の少女は話が終わると一つ丁寧なお辞儀をし、直ぐにチルノという少女を連れ、飛び去って行った。

「先程の二人は誰なのですか?」

「さっきの青いのは…チルノという妖精ね」

なるほど…え?バカって…

「そして緑の方は、大妖精。妖精にしては頭も良くていい子よ」

要するに、青いチルノは⑨^{バカ}。

緑の大妖精は良い子。

そうですか、大妖精の苦勞が目には浮かびます…。

「彼女らの住処は湖ですか?」

「ええ、なぜ分かったの？」

「妖精と聞き、そう思ったのです」

幽香はセイバーの方を見やると、目を瞑り懐しそうに口元が綻んでいた。

湖というと、あの、聖剣を授かった時のことを思い出す。あの時、もしも選定の剣を抜くことが出来ず、普通の少女として生きることが出来たのなら、今とは違う生き方をする事が出来たのだろうか。だが、これで良かったのだと思う。今では、あの聖杯戦争で出会った、あの少年に感謝をしなければならぬ。

過去のやり直しは、あの時、亡くなって行つた彼らの、想いを。踏みにじることになると…。そう教えてくれた、気付かせてくれた、あの少年に。

そして、今向かっている博麗神社の巫女の事について聴いてみた。

「ところで、ユウカ…博麗の巫女という方はどのような人なのですか？」

「霊夢はね、一言で言う度、が過ぎる程のお人好しね」

「と言いますと？」

私は、彼女の顔が緩くなっていくのを見た。

「相手が妖怪だというのに、普通に接してくるし、悪さをする妖怪には、お仕置き^退するし、退治した妖怪にも優しくして、世話好きで、貧乏な巫女よ」

その少女が聞いていれば、一言余計だ。と言いつつそうだ。

褒めているのか、悪口なのかどちらなのだろうかと思つたが、その霊夢という少女の話をしている幽香は、どこか、手に負えないが、優しい性格の妹の話をしている様な、慈愛に満ちた表情だったのだ。

それを聴いていた彼女は、微笑みつつ言つた。

「ユウカは、その霊夢のことが大切なんですわね」

すると彼女は、顔を真っ赤にして言う。

「だッ…誰があんな奴のことなんか大切なのよ／＼。心配する家族でもあるまいし／＼」

そして、してやったりな顔で私は、言う。

「私は何も心配するとも、家族のようだななんて一言も言つてませんよ?」

すると、顔を赤くしている彼女は耳まで赤くした。

「なッ…誰にも言わないでよね。特に霊夢には／＼」

私は、微笑みながら言つた。

「ええ、分かりました。この事は二人だけの秘密ですね」

聞こえないような声で何かを呟く幽香。

「これから戦う相手だというのに、やりづらくなるわね。まったく／＼／＼」

何か言ったようだが聞こえなかった。

「何か言いましたか？」

「フン…何でもないわよ。さっさと行くわよ」

「ええ、分かりました」

言い終わるとそそくさと歩くペースを上げていた。

どこからか「カシヤツ」という音が鳴り響いた。

だが、幽香はそれどころではないのか、後ろから追いかける彼女も、聞こえてはいないようだった。

（フフフツ、特ダネのスクープ記事ができそうですね。いや？これで彼女のことを弄るのも見てみたいですね）

そんなことも露知らず二人は、木漏れ日のさす森の中、博麗神社へと向かうのだった。

突然、ユウカが立ち止まった。なにかに出くわしたのだろうか。何も感じはしないが。

「着いたわね。ここから階段を上った先に博麗神社はあるわ」

なるほど。もう付いたのか。あれから十分も経たずに着いたようだ。すると見えてくるは、上るのがつらそうな、どこかで見たような、かなり長い階段が続いていた。

「案内をして頂き、ありがとうございます」

「いいのよ。ぐうたらしている子を叩き起しに来た様なものだし」

「？」

ぐうたらしている子？叩き起す？誰のことを言っているのだろう。まさか、その巫女というわけではないだろう。

そして、やっと階段を上り終え鳥居をくぐった幽香とセイバーは、幽香に連れられ霊夢が普段生活をしている生活スペースへと行った。

「霊夢ー！いるのでしょ？」

建物の角を曲がった先に少女は、居た。

黒髪に、後頭部に大きな赤いリボン、胸元には黄色いリボン、赤と白を基調とした、少し露出が高い巫女装束の纏った少女が、縁側で寝ていたのだ。

「霊夢、何シテルの？」

ユウカは、少し怖い口調で霊夢を起こす。

少女は重たい瞼をこすりながら、大きなあくびをしている。どれだけの時間、寝ていたらそうなるだろうかというほどのねぐせがついていた。それに気づいた霊夢は頻りに寝癖を直そうとしていた。だが、幽香の姿を見た途端、凍り付いた表情で、慌てて返事をする。

「お、おはよう。幽香何しに来たの？」

すごく動揺している様だ。おはようと言うには、遅い時間だったが、その事には触れず幽香は喋る。

「この娘の事なんだけど」

「はッ！参拝…客、じゃないわね…」

セイバーの姿を見るや否や、参拝客ではないことに気づき、かなり落ち込んでいるようだ。

どうしてそこまで落ち込んでるかと言うと、それもそのはず、元々参拝客が少ない上、神社に妖怪がいたり、その巫女と仲良くなどしている姿を見れば、悪い噂がすぐに広まる。今でもほんの少しは来てくれていたようだが…。だが、セイバーを見た途端、何かを感じたのか参拝客ではないことに気づいた。

「貴女、幻想郷の住人じゃないようね」

重たい雰囲気でするが頻りに直そうとしている姿で、台無しだ…。

「今、誰かに馬鹿にされた気が…」

「霊夢、気にしない…」

そう言われた霊夢はもうその事は忘れたかのように先程の話を続けた。

「その妖怪からどこまで話を聞いているかは知らないけど、幻想郷この説明をするわね」

「ここは幻想郷と言われる場所。ここには様々な種族が存在しているわ。人間や妖怪だったり、他には吸血鬼や神だったり…」

それを聴いてセイバーは固まった。

妖怪や神？吸血鬼まで？先程の妖精もそうなのだろうか。それと霊夢は先程なんと言った？幽香のことを妖怪？思っていた妖怪と想像があまりにも違う。え？見た目人間なのに、妖怪？

「幻想郷には偶に、迷い込んできたりする人がいたりするけど、その人たちは元の世界に帰る人や、此処で永住する人もいる。貴女は、帰りたいと思うの？帰りたいなら帰らせあげられるわ」

もう私には故郷と呼べる場所は無い。場所があっても知り合いは居ないし、シロウの元に帰ってもどのような顔をしたらいいのか…。でも、シロウなら明るく受け入れてく

れるだろう。

そんなことを考えながら、少し頬を赤く染めていた。

すると、後ろからいきなりユウカから声をかけられ、変な返事をしてしまった。

「うひゃい？」

二人は顔をそらして必死に笑うまいとしている。

いつそのこと笑い飛ばしてほしい。いや、やはり嫌だ。やめて、恥ずかしい。

恥ずかしさから顔を赤くしながら、咳払いを一つ、落ち着いてから先程の霊夢の質問に応える。

「私には、帰る場所が無い。だからこの幻想郷にいてもいいだろうか？」

危険かもしれないと断られるかとも思ったが案外受け入れてくれた。

幻想郷とはどんな事も受け入れてくれるらしい。善であろうと、悪であろうと、残酷な程に……

「ええ、いいわよ。霊夢の所ここに泊めてもらえばいいわ」

「宜しいのですか？」

私は聞いた。本当に泊めてもらっているのかどうか。

すると彼女は、嫌そうな顔をしたが、なにか諦めたのか、すんなりと了承してくれた。「何勝手に決めてるのよ。はあ、仕方ないわね。当分うちで住むといいわ、だけどいつか

は新しい家を見つけてよね」

後から聞いたのだが、一人暮らしには慣れたが、一人では何かと不便な事があるとの事。風邪にかかってしまった時だとか。

決してユウカが怖いからとは言わなかった…。

「ええ、わかりました。ありがとうございます」

文句を言いながらも優しくかった。やはり、ユウカの言っていた通りの人物だった。

「そう言えば、自己紹介がまだでした。私は、セイバーと申します。これから、どうぞよろしく」

「ええ、よろしく。私は博麗霊夢。この神社の巫女をやっているわ」

すると、彼女はもう話は終わったとばかりに再び寝ようとしている。寝癖はもう直っていたようだが…。

また寝癖が付くのではなからうか。

しかも今度は、布団を出し始めている。

——ダメだコイツ…早く何とかしないと——

見るに耐えないと思つたのか、幽香が霊夢を叩く。はた

「こら、何勝手に寝ようとしているのよ」

「はあ…仕方ない。もうしばらくおきておくわよ。」

何様のつもりよ。とユウカは言っているが全然耳に入っていないようだ。

「これから、セイバーと模擬戦をするから念の為、結界を張ってくれる？」

え…なんで？と言うような顔。

凄く気怠げにしている。

そこでセイバーが説明する。

「私の実力が見たいようです」

すると彼女は頷いてくれた。恐らくこの幻想郷で、私は、危険かどうかそれを見られるのだろう。ならば引き分けに持っていくとしよう。

この時、私はユウカの実力を見誤っていたのだった。

「結界は張ったから。いつでも始めていいわよ」

「ありがとう、霊夢。それじゃ、始めましょう？セイバー」

「ええ、始めましょう」

セイバーは空虚を掴み剣を構えた。やる気十分。

否、次第に顔色が暗くなっていくセイバー。

どうしたの？と二人が首を傾げている。

地面に膝をつき、手は地面を握りしめ、頭を下げた。

そしてセイバーは、申し訳ないとばかりに言った。

「…すまない。剣が…私の剣が、無いようなのです。剣がなければ実力を発揮することが出来ない。本当に、すまない」

それを聴いた霊夢と幽香は驚いていたのだった。

第四話 意思の確認 1

ふむ……どこどこ？

え、いやさつきあのただならぬ雰囲気的女性に落とされたんだよな？あの場所落とし穴でもあったか？

というかまず、なんでさ！？なんで目玉ばつかなのこの空間。え？なに？俺どうなったの？

「え？……どこどこだ？何この怖い空間……」

完璧にパニックになっていた。

それもそのはず、いきなり知らない人から自分の名前や夢を言い当てられるわ、行きたくないと言っているのに無理やり連れていかれてもしたら、普通にパニックになるであらう。

数分？すると、この無数の目玉達は何もしてこないことがわかった。驚きや少しの恐怖のあつた感情を落ち着かせ、歩き始めた。

ん？なんだろう。数歩先にあるあの三つの穴は。

恐る恐る覗いて見た。するとそこには、自分の色々な姿があった。だがしかし、自分はこんな風景を知らない。

妹の為に戦っている自分。

桜の為に弓兵の腕を移植して戦う自分。

自分の夢正義の味方の為にあの弓兵と戦っている自分。

どれも自分が経験した訳ではないし、この風景の自分は何を得たかも知らない。

いつの間にか自分はこの風景から、目が離せなくなっていた。自分はこの風景から、何が分かるのか知りたくなかった。

妹の為に戦う自分は、妹の犠牲で救われる世界より、妹を救う為、世界の悪となり戦う。桜の為に戦う自分は、世界ではなく、彼女妹を守る正義の味方になると決めたから戦う。自分の夢の為に戦う自分は、擦り切れ摩耗してしまった未来の自分とは、違う正義の味方になると誓う。

この風景は、恐らくあの掴みどころのない女性が見せたものではあるだろう。しかし、なんのために見せたかは分からなかった。

でも、自分なりに答えは出た。

恐らく他人からは、それは間違っている、狂っている、などと言われるだろう。

だが、それでも構わない。もとより自己満足だった。

自分の身の周りの人には、せめて泣いているより笑っていて欲しかったから……ただ、その身の回りの人が増えすぎてしまったらしい。

守ると決めた人を妹に、また一人の女性にした自分はどんな事を思ったのだろうか。

多分、かなり悩んだのだろう。だが、最後には、後悔だけはしたくない。そう思ったに違いない。

「俺は……」

俺もそう決断して彼女と別れたのだ。

後悔はしていない……と言えば嘘になるだろう。

だが、あれで良かったのだ。彼女の事を思つて別れた決断に嘘偽りは無い。ならそれでいい。

いつかきつと諦めずに、追いかけて続ければ。

意志が固まった時この少年は、今までの自分にはない力を感じた。

全く新しい力だった。だが、今までの自分と変わりない力。スイッチが二つになったような感覚だろうか。

今までの力は、多少なりとも疲労感があつた。しかし、新しい力にはそれが無かつた。これが何を意味するのかはまだ分からない。

それと同時に、何かが増える感覚を感じた。

自分の心の中の、剣を内包した世界。

その世界に新たなる剣が追加されて行く感覚を。

新しい力は、疲労感なく自分の心を具現化することが出来た。それと同時に、疲労感の無い力と、今まで道理の魔術で自分の心を、具現化させると疲労感は多少あるものの、今までの倍以上もの投影することが出来た。

何故か、練度も今まで以上に高いものとなった。

これからも鍛錬を怠るつもりは無いが、昔みたいに精神をすり切らせたりして、死の危険性などはおおいになくなったと思える。

これから行く世界、どんな苦難が待ち受けているのだろうか。

「何事も無く平和であつて欲しいな……」

自分の意思も再確認出来たところで、衛宮士郎はこの空間から放り出された。

第五話 意思の確認 2

ここはヨーロッパのとある郊外。奇を衒うような程の紅い洋館、紅魔館と呼ばれている。

その地下の大公書館で、今日も本を読んでいる魔法使いの少女がいた。名をパチュリー・ノーレッジ。

綺麗な紫色の髪に、パジャマ姿、常に本を持っており、喘息持ち。

「ふむ」

数多くある本の中の1冊「英雄譚」様々な英雄、反英雄などを多く書かれているこの本に興味を持っていた。

その中でも特に気になっているのは、一人の弓兵だった。その弓兵は、ほかの英雄達とは違ってほとんどの情報が無いのだ。別に、その情報が消されているなどのようなことはなく、本当にこの弓兵だけの説明が少なすぎる。

出身は愚か、どのような功績があるなどのことも書いてない。逆に何故この本にこの弓兵が書かれているかの方が疑問なのだ。

しかも弓兵だと言うのに双剣を使い、白兵戦をこなすと記されている。

ただ、その双剣は白と黒だったそう。

すると赤い髪の少女がはなしかける。

「パチュリー様。今日もその本を読まれているのですね」

黒と白を基調とした燕尾服の小悪魔。

パチュリーが召喚した本の整理などをしている使い魔なのだ。

「ええ、やっぱり気になってね。この弓兵の事が」

魔法をかけてこの本の記憶を呼び起こしてみたところこの弓兵に出会った記者がこの本を書いていたらしい。

するとより鮮明に解かったことがあった。それは、その弓兵は戦場が終結するといつの間にか消えている。

その他には赤い外套で白髪。

解ったことを整理していると突然この図書館に大きな音が響いたのだ

ドドオオオン!!

ドサツ！ドサツ！

あゝあ、本が…埃が…喘息が…

仕方ない、空気の流れを変えてやるとしよう。

発動した魔法により塵や埃などは外へと繋がる通気口へと吸い出されて行った。

「こあ、悪いけど見てきてくれる？」

「 Σ d (。 \forall 。d) わかりますた！」

「……………」

「分かりました。行つてきますね」

「わかればいいのよ」

はあ、パチュリー様だったら冗談とか通じないんでしょうか…無言の圧力なんてかけないでくださいよお。

いつも同じ返事ばかりだと詰まらないじゃないですかあゝ

まあいつもの事なのであまり気にしてませんが…

ところで今の音は何だったのでしょうか？

いきなり放り出された場所は何やら本が無数にあるような縦にも横にも長い空間。まさに大図書館である。

「痛つつつう！…突然…放り出されたと思ったら…また違う場所…いつたいここは何処なんだ？」

そう思い辺りを見回してみる。

「本、棚…か。どうやら次は図書館にでも飛ばされたみたいだな」

（そう言えば、怪我は…？…あれ？無いな…）

どうしてだ？…あの時、全て遠^アき理^ツ想^ロ郷^ンはセイバーに返したはずだ…なのn「あのう…ん？」

誰かから唐突に声を掛けられた。声音は女性の物だ。

そして声の聞こえた方へと振り返った。

（背中や頭に生えている蝙蝠の羽？。コスプレかなんかだろうか。かなりリアルに出来ているな——）

「大丈夫なんですか？…その、あの高さから落ちたみたいですし…」

「うおっ!?動いた!?!…え?あ、ああ、大丈夫だ。何ともないみたいだ」

作り物だと思っていた羽がいきなり動き出し、驚きのあまり声の上擦っていた。

「本物…なのか？」

「?…この羽のことですか?これは本物ですよ?」

「本物…なのか…」

（何なんですか？この人…普通なら大怪我とか気を失ってそうですけど…）

（確かに…動いてるな…）

この小悪魔がそう思うのもそのはず、普通なら人は本に巻き込まれながら10mほどの高さから落ちたらなんともないはずがないのだ。

一方衛宮士郎は驚いていた。コスプレかなにかだろうと思っていた羽が本物で、いきなり動き出したからだ。

少し落ち着いてここが何処なのか聞いた。

「すまない。悪いが質問していいか？」

「ええ、いいですよ？」

「此処は、何処なんだ？」

「ここですか？此処は偉大なる魔法使いパチュリー・ノーレッジ様の大図書館です!!」

小悪魔は自分の事のように自慢げに語っていた。

なんで自分の事のように言うのだろうか…

それと聞きたい内容と違うんだけどな…

魔法使い…か。

パチュリー・ノーレッジ…どんな人だろうか…

「では、こちらへ来てください。私の主に用がありそうですし」
何故わかったのだろうか。そこまで顔に出ていたのだろうか。

「っ!?!…そうだな、頼む」

そして本棚の間を歩いて行った。

名前は知らないがこの蝙蝠の羽の生えた少女の後について行った。

「パチュリー様〜!」

「こあ、思ったより早かったわね。本は片付けたの? 何冊か落ちたような音がしたのでけれど」

「うぐっ…:そ、それより! 今はこの方です! 何やらパチュリー様に用事があるみたいですよ」

何やら焦っているようだが俺には関係ないだろう。

「こあ、誰ともわからない人を警戒しないのはいけないことよ。後でお仕置きね。本も片付けてないようだし」

「パ、パチュリー様あ〜！」

涙目で主人に訴えているようだが聞き入れるつもりは無いらしい。

「あ、後でよかつたら手伝うぞ？」

「本当ですか?! ありがとうございます!!」

先程までの涙目が嘘のようだ。唇の端が釣り上がったように見えたが気のせいだろう。

「それより。貴方、名前は? 何だか貴方からは魔法と同じようなものを感じるのだけど…」

一気に場の空気が冷えていくような感覚になった。誰とも知らない人物がいつの間にか現れているのだ、今までの会話に殺気が無かったのも、さっきのこあとという人がほとんど警戒していなかったからだろう。

「俺は、士郎。衛宮 士郎だ。俺が使うのは魔法じゃない、魔術と呼ばれるものだ。」

「じゃあ貴方は魔術師と言ったところかしら？」

「いや、俺は魔術師見習い。魔術使いと言ったところだな」

「自己紹介が遅れたわね。私はパチュリー・ノーレッジここの図書館の管理をしているわ」

「では、改めて自己紹介させていただきます。私は、パチユリー様の使い魔にしてこの整理を行っております。こあと申します」

そしてさつきと同じ質問を試してみた。

「すまない。さつきも聞いたんだがここはどこなんだ？それと、今はいつなんだ？」

「ここはヨーロッパ辺りの紅魔館という館。それといつ、だったかしらね。たしか…2001年の終わりだったと思うわよ？」

「2001年だって!？」

「ええ、そうだったはずよ？ねえ、こあ？」

「はい、そうですね。12月に入ったばかりですね」

「なん…だと…!？」

どうなっているんだ？あの掴み所のない油断出来ない女性に連れていかれた場所は幻想郷だったんじゃないのか？

「貴方…どうやらこことは違う場所にいたみたいね。言動から察するに私達の時代より先…さしずめ タイムスリップ——と言ったところかしら？」

「タイム…スリッパ…」

「どうやら本当のことらしい。嘘を言っているようにも見えないし。ヨーロッパ——俺は日本に居たはずだ。」

すると彼女達は少し警戒を解いた。

「どうやら相当混乱しているようね。まず上で紅魔館こまの事を聞くといいわ」

「上？ここは地下なのか？」

「ええ、この主に挨拶でもしてくるといいわ。こゝこの人をレミイの所へ連れて行ってあげて」

「あ、本は片付けてから行ってね？」

「は、はい。行ってきます。パチユリー様」

片付けを終わらせた俺とこゝあは紅魔館のある主の下へと向かった。

ここにテラスで夜空の風景を楽しむ一人の少女が居る。

名前は レミリア・スカーレット

外見は10歳前後なのだがその実、500歳なのだ。

彼女には血の繋がりのある家族は1人しか居ない、だが家族と呼べるものは何人か居る。

「来て。咲夜」

「はい、ここに。何か御用ですか？」

「ここに客が来るからお茶をお願いするわ」

いきなり主に客が来ると言われたにも関わらず、主に言われた事をこなす。

「かしまりました」

少女はこれから起こることが楽しみで仕方が無い。そういう表情をしつつ言った。

「フフ、これから楽しみだわ…私のためにも、そしてあの子のためにも…」

そして俺はこの主の元へと案内された。

「う、わあ。凄く広いな」

アインツベルンの城より広いんじゃないかと思う程広い空間だ。

奥の方に、ふんぞり返った少女が居る。

外見は10歳前後と言ったところだろうか、

この子も背中に蝙蝠のような羽がある。

髪の色は銀色のような水色のような、なんとも曖昧だが綺麗な色だ。

そして、その隣には見た目16歳前後で銀髪にヘッドドレス。

頬の両隣の所でお下げを作っている。

青を基調としたメイド服に身を包み、胸元には緑のリボン。まさに瀟洒なメイドだ。

そして、俺のことをだいぶ警戒しているようだ。

数秒の沈黙の後ふんぞり返っていた少女が口を開いた。

「私はレミア・スカーレット。此処、紅魔館の主にして、吸血鬼」

「そして私は、お嬢様に使える紅魔館のメイド。十六夜 咲夜でございます」

「俺は、衛宮 士郎。魔術使いだ。」

「吸血鬼だっ!?あの血を吸ったりする吸血鬼か?」

「それ以外にどんな吸血鬼がいるって言うのよ……」

互いに自己紹介が終わった後、レミリアという少女が突拍子もないことを言った。

「ククク、あなた面白いわね」

何のことだろう。そう思った。するとさらに驚くことをこの少女は言った。

「貴方……ここで働いてみない？」

そこに居た誰もが驚いていた。

俺は一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。

ふんぞり返っている少女の隣に居たメイドさんが震えた声で言った。

「お、お嬢様……？」

「何かしら？ 昨夜」

「お嬢様、この十六夜

昨夜。これから仕事を頑張りますので……どうか……どうか、私

を解雇するのは止めて頂けませんでしょうか……？——お嬢様、私は“知らない子”なのですか？」

するとお嬢様と呼ばれた少女は泣き崩れた我が子をあやすかのように優しく囁いたのだった。

「咲夜？誰がそんなことを言ったの？私は貴女が仕事を頑張っているのはよく知ってるわ。それに誰が貴女を知らない子なんて言えるの？紅魔館には貴女を必要とする者が何人もいるわ。貴女は知らない子なんかじゃない」

「では……何故、新たにこの者を雇うと申されるのですか？」

「バカね。貴女……少し頑張り過ぎなのよ。偶には休む事も大事よ？貴女が倒れてしまつては私達が困ってしまうもの」

その言葉で周りの者はわかつたようだ。この十六夜咲夜は働き過ぎなのだ。生まれながらにして持つてしまった異能、そのせいで周りから除け者にされた彼女。そんな彼女を拾ったのがこのレミリア。それからというものの咲夜はレミリアに気に入られようと仕事を頑張つていたのだ。レミリアにとって彼女は、既にかけてあげのない存在なのだ。知らない子な訳がない。

「お嬢……様、申し訳御座いませぬ。私は、お嬢様のお心遣いも察する事が出来なくて……」

「いいのよ、咲夜。これからもよろしくね？」

「はい！」

これが主従愛というものだろうか。どうやらこのメイドさんは俺を雇うと言った事でもう自分が必要無いと思つてしまつたようだ。

すると今までふんぞり返つていた少女は、今も変わらずふんぞり返っているのだが、その隣のメイドさんは今のやり取りから立ち直つたのかハンカチで涙を拭つていた。

「話を戻すわね？ 貴方、ここで働いてみない？」

「俺をここで雇う？ どうしてだ？」

「貴方に興味があるの。貴方、此処とは違う場所に居たんじやないの？ 他には、少なからず帰りたいと思つている」

「っ!? … どうして、それをしつてるんだ？」

「貴方には見えないものが私には見えている。」

「それと、べつにここから出て行つても構わないわよ？ それで、貴方が元いた場所とは勝手が違うこの場所で生活していけるならね」

「分かった。俺を、ここで働かせて…くだ、さい。」

「ああ、それと言葉は直さなくていいわよ。それに私を呼ぶ時もお嬢様じゃなくてレミアアでいいわ」

「それは助かる。ありがとう」

何となくだが、このレミアアという吸血鬼の下で働いた方がいいみたいだ。数年前のヨーロッパ辺りなんて俺には知識が無い。ここで働いていいとは願ったり叶ったりのようだ。

(セイバー、俺…頑張るよ。)

そして、いつか必ず、俺は本当の正義の味方になってみせる。

俺は、諦めない。

いつか必ず彼女に会えると信じて。

自分の信念を貫き通してみせる。

例え借り物の夢であっても、誰かに幸せであって欲しいと願うのは間違いじゃないはずだから。

第六話 博麗神社にて

あれから何秒経っただろうか。

セイバーは未だに下を向いている。

「えっと、セイバー？どうしたの？」

そう幽香は聞く。

理由はわかつている。だが聞く。念の為。

「私の剣が…無いのです…」

（記憶が一部途切れていますね…マーリンの奴め、どうやら記憶消しましたね。しかも雑に）

どうやらセイバーは自分の記憶を消されたことを自覚したようだ。

（マーリンの奴め、次に会ったら絶対斬る…）

そんなことを考えているとは露知らず、霊夢はセイバーに木刀を渡す。

「セイバーと言ったわね？貴女、剣の代わりになるものだったらいい？なら木刀を貸すわよ？」

彼女がタダでものを貸すとわ見え無いのだが「なんか言った？」あ、いえ何でも。い

「いや、地の文読むとかやめてくださいよ。…はい、彼女は時と場合によりタダでも、物を貸してくれる優しい巫女さんなのです。ハイ。「ん、宜しい」

「いや、時と場合によりって言ったのにいいのかな？ いいならいいや…」

すると幽香は一人呟く霊夢に言った。

「いやあなた何言ってるのよ」

何食わぬ顔で霊夢は言う。

「何も？」

「そ、そう…」

あれ？幽香さん？何を察したのですか？

まあいいです。

コホン、失礼、話が逸れました。

セイバーは今まで暗かった顔が一気に明るくなり霊夢に詰め寄る。

「よ、よろしいのですか？」

「ええ、良いわよ？」

「後で何かしらの貸しとかいいませんか？」

「言わないわよ！」

あれれ？セイバーさんもなにか察したのかな？（ええ、話は聞かせてもらいました）こいつツ！直接脳内にツ！って、やめてくださいよ皆さんして。あれ？ということは幽香さんまで？ないですよ？大丈夫ですよ？幽香さん、顔そらさないでー。

もう皆さん地の文に割り込まないでくださいよ？

え？なに？保証できない？ホントやめて欲しいです。

話進まなくなっちゃう。

コホン

失礼。またしても話がそれてしまいました。

今までのやり取りがまるで無かったかのように……「無かったことになど——」
無かったかのようになり。

「……」

「え、えと、貸してくださるのですね？」

「え、ええ良いわよ？」

「これで戦うことが出来ます。ありがとうございます」

そしてまた、セイバーと幽香の2人は距離を取り直した。

2人の立つ場所は、神社の境内にかなり近い開けた場所だ。

「すみません。お待たせしました。私の實力お見せいたします」

「ええ、かかってらっしゃい?」

セイバーは木刀を構える。だが、一方幽香は、セイバーが動くまで何もしないようにで。

刹那、セイバーが弾丸のようになり幽香に突進をかました。

それをものともせず幽香は躲す。

「どうしたの?それでおしまい?」

「何の、まだまだあ!」

続けて右上から左下へと斬る。これも躲す。

次は左斜め下から右上へ斬りあげる。

だが、これも難なく躲す。

そしてつぎは先程の切り上げに繋がるように体を回転させ、左上から右下へと飛び斬りをする。

これは傘で上からくる木刀を受けるようにしながら滑るようにして軌道をずらす。

一瞬セイバーが押しているようにも見えるが、幽香は全ての攻撃を受け流し続けた。

幽香は閉じた傘でいなすだけ。

これでは駄目だとセイバーは思い。一度距離を置く。

(駄目ですね。すべて行動が読まれているかのように簡単にいなされてしまう)

幽香の能力は全くとは言われないがあまり戦闘に役立つとは言えない。

植物を操り相手を行動不能にさせていたぶったりすることも出来るだろうが、強者との戦いではそれは意味を成さない。

それをしないということは、どうやら幽香の眼にはセイバーは強者と映ったようだ。

(今はアヴァロンも聖剣も無い、だがしかし、これまで培ってきた技術と直感がある。私に負けなど……いえ、そう考えては駄目ですね。負ける事によりまなぶこともある。ですが……本気で行きます！)

本気を出したセイバーを前に幽香は漸く構えた。

周囲の空気が一気に重くなる。

それは、セイバーの魔力だけではなく幽香の妖力がこの場所でぶつかり合っているからだ。

そのせいで辺りは荒地一步手前となっている。

セイバーと幽香は同時に動く。

「行くぞオオオオ!!!」

「はアああああ!!!」

木刀と傘が交差する。

セイバーと幽香の鏝迫り合い。

(やつぱり……この娘……強いっ!)

(やはり……強い……このままでは、こちらが負けてしまう)

2人は一気に離れ、間合いを取る。

「強いですね。ユウカ」

「貴女も強いわね。セイバー」

「私も本気で行くわよ?」

「ええ、元よりこちらは本気を出している!」

先程まで放出させていたセイバー魔力と幽香の妖力、だが次の瞬間、研ぎ澄まされた物へと変わる。

次に動くは幽香だった。

瞬時に動き相手の目から消える。

斬りかかるはセイバーの背後。

「——ッ?!」

傘を不利な体勢で受け止めるセイバー。

それに続けて斬り続ける幽香。

武器にしているのは日傘だと言うのに物体を切り裂く程鋭い矛先。

セイバーは2発受け止めきれずダメージを貰う。

「グッ!」

間髪入れずに斬り付ける幽香。

それを躲すセイバー。

すると後ろにあつたかなり太い木が鋭い切り口を見せる。

(段々力が上がると共に切れ味も上がっている……このままでは、殺られるッ!!)

隣にあつた木を蹴り、宙返りをし、幽香の反対側に降り立つ。

(どうする?このままですら……ッ?!——これは……木刀が、光っている?!)

淡い光を放つ木刀に気づいた者が2人。

「もうそろそろ飽きてきたわ。次で終わりにしましょ？セイバー」

幽香はそう言うのと傘を空に掲げる。

そして始まる詠唱。

——大地よ

——花々の恩恵よ

——咲き誇るは一輪の華

——今こそ、生命の灯火を束ねる時

(なッ——!!!)

セイバーは驚愕に顔を歪める。

あれは高濃度の魔力の塊、もはや宝具の域だ。

あれを直に受ける訳にはいかない。

アレをどうする？

躲す？逸らす？

どうすれば——ッ?!

先程より光が強くなっている——これならッ!

木刀を両手で握りしめ空に掲げ、構える。

—— 神々よ

—— 聖なる神木よ

—— 生えあるは神聖なる大樹

—— 今、御身の権化たる我が身に力を

『スピリチュアル・カリバー研ぎ澄まされた靈力の劍』アアアアアア!!!

『マスター——

—— 『スパーク』 ツ!!!

高濃度の妖力と靈力のぶつかり合い。

広まってゆく被害。

それでも尚止まらない2人。

「はああああああああアアアアアア!!!」

「グッ——ガアアアアアああああ!!!」

一瞬押され気味になったセイバー。だが、負けじと押し返す。

そして、高濃度の力のぶつかり合いによる爆発。

『ドオオオオオオンッ!!!』

草原だった場所は今や、荒れ果てた荒野となっている。

離れた場所に倒れる2人。

「ハア…ハア…やるわね、セイバー」

「そちら、こそ…ハア…やりますね、ユウカ」

ボロボロな2人。

生まれる新たな絆。

認め合う2人。

「いい感じのところ、悪いけどね…2人とも?…なにか、言い残す事はあるかしら?」

結界を貼っていたにも関わらず荒れた土地。

霊夢の目の笑っていない笑顔。これ程までに怖いものはない。

だが、次の瞬間幽香の一言により少し収まる怒り。

「この荒れた土地は私達が治すわ」

「そう、跡形もなく治してちょうだい？」

だが、まだ収まらない怒り。

「もちろんセイバーも手伝いなさいよ？」

「分かりました。……レイム」

「あの、木刀、ありがとうございました。これはお返しします」

「いえ、それは貴女に譲るわ」

「良いの、ですか？」

「ええ、いいわよ」

広大な荒地を前に更には木刀を譲るといふ。

怒りを顔に恐ろしい霊夢の台詞に戸惑うセイバー。

タダで物を譲るとは思わ「黙らないと？」あーハイ。

この人は物をタダでも譲ります。もうそれはそれは気前がいい程に——『……ゴゴゴ

ゴ』あ、ちよつまつて？ごめんなさい、ゆるしてー！いやああああ！

「しばらくお待ちください」

手加減してよ！ボロツ

話が逸れてしまいすまない。

2人を残して神社へ帰る霊夢。

(あの力、紛れもなく霊力だった…あの木刀私が使った時は何ともなかったのに……このままセイバーに使わして様子を見てみようかしら)

その後、広大な荒地の修繕をするセイバーと幽香だったのであった。

「ユウカー。この石はどこへ？」

「あー、適当にそこら辺でいいんじゃない？」

「真面目にしろー！2人とも!!」

「(ぐ)めんなさい……」

士郎さんのステータス

名前 衛宮 士郎

年齢：17歳

体重：58kg

身長：167cm

fateのサーヴァント風のステータスで表すなら。

ほとんどエミヤ寄りのステータスですね。

〔ステータス〕

能力の關係上、身体能力の向上しており、普通の人間より高めになっております。（普通の人間のステータスわからないw……全部CかD？w）

一部エミヤより高くなっちゃってるよ…

／（＾o＾）＼ナンテコッタ

筋力：DとC+（努力すれば人の限界なんて超えられる…よね？）

耐久：C↘B（まあ鍛えると上がるよね？）

敏捷：D↘C+（目は良いので体を鍛えると変わってくる）

魔力：C+↘B+（使い切って、回復を繰り返せば限界値は増える。のちにB+を超えるかも）

幸運：E？（時と場合によるだろう、だが基本は不幸？なのだ）

宝具：E↘A（投影した物が『剣』にカテゴリされるならランクが跳ね上がる）

魔術回路

質：C（強化や投影等にだけ特化している）

量：C↘B（能力により）

普通の魔術師と比較すれば『へっぽこ』

【保有スキル】

・心眼（真）：B—

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

だが、この物語の序盤の士郎はまだこの域に達していない。

・鷹の目：B―

千里眼の上位互換。視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。遠方の標的捕捉に効果を発揮。

ランクが高くなると、透視、未来視さえ可能になるが、Cランクではその域には達しない。

だが、この物語の序盤の士r（ry）。

・投影魔術

道具をイメージで数分だけ複製する魔術。だが、士郎や、エミヤの場合は消えること無く存在し続け、耐久が無くなるか任意で消したりできる。エミヤが愛用する『干将・莫耶』も投影魔術によってつくられたもの。

投影する対象が『剣』カテゴリの時のみ、ランクは飛躍的に跳ね上がる。

この『何度も贗作を用意できる』特性から、エミヤは投影した宝具を破壊、爆発させる事で瞬発的な威力向上を行う。

『剣』でなくとも投影することは出来るが、普通より多く魔力を消費する。

【能力】

『心象を具現化させる程度の能力』

身体能力の向上（全パラメータアップ）。元々、士郎の魔術回路は27本だったのだが、この能力を得た事により、もう27本が増える。

増えたはいいが、その事を知らない士郎はいつもの27本しか使わない。

スイッチが二つになった感覚。

能力としてなので魔力消費は無い。

投影魔術と併用するなら魔術行使の分だけ魔力を消費するため能力だけ使うなら少し疲れるくらい。

複製可能なら相手のスペルなどをイメージにより再現可能。だが威力はオリジナルより基本は下。剣など武器投擲。また、その弾幕等を壊れた幻想ブローケン・ファンタズムさせることで威力が

上がる。

戦いの最中で相手の剣の技術や攻撃手段の技術など模倣することも出来るが、半端者で決め手に欠ける。

落第騎士の英雄譚で言う主人公の模倣ブレイドステイル剣技の劣化版。

模倣することは出来るが一点を極めた者より劣る。

（後に修行や、それらを極めるため修練し続けたなら劣化はほとんど無くなる。）

スキマでは使えたが、ヨーロッパ編では、士郎は幻想入りしてない為か程度の能力は

使えなくなっている。

ほかの人は使えるっばいけど生まれ持ったの能力が程度の能力になったと考えても
らえば…なので皆さん（東方キャラ）の能力も向上したりします。（程度の能力を手に入
れることで自分の能力やステータスが強化される）

幻想入りした後は、もう27本増えていることをパチュリーに言われてから気づく。

パチュリーの研究の材料にされるのは絶対：

54本となった魔術回路で士郎は何をするのか：

この能力により、劍製は練度が上がり、数も増え、能力の名前により後に、自分に出
来るとは、劍を作るのではなく、自分の心を具現化させることと気づき、自分の生
まれ持った適正に気がつく。

イメージにより力の強弱が左右される。

彼は、その背に守るべきものがあるなら何度だって立ち上がれる。体がどれだけ傷だ
らけになろうと立ち上がれるなら戦える。

こんな感じではありませんがあとから追加したり、修正したりするかもしれません。

第七話 紅魔館での出来事

「咲夜、彼に部屋を案内してあげて。それと仕事内容の説明もよろしく」

「かしこまりました」

「衛宮さんこちらです」

「あ、ああ。わかったよ」

そして俺は自分の部屋へ案内された。

次の日の朝、彼は説明を受けることになる。

――
士郎を部屋へと案内した後咲夜はレミリアに質問をした。

「お嬢様」

レミリアは何か本を読んでいるようだ。

その本の題名は【英雄譚】

「何かしら？ 咲夜。今本を読んでいるから手短かにね？」

そう言つて本を閉じ、机の上に置き咲夜の方に顔を向けた。

「彼をここで働かせるのは宜しいのでしょうか…その——」

「彼がこの紅魔館にとつての敵か否か」

「はい。その通りでございます」

「心配しなくていいわ。私が見た限りでは彼は敵ではないわ」

「……お嬢様がそう仰られるなら、分かりました。」

（だって、私が見た限りではこの本の”弓兵”と彼の運命。かなり他人事では済まされそうにないようなのだもの……面白くないわけないじゃない……それに、何より、私の妹を……）

レミリアの見た、彼の運命とは、

赤い土の荒野の丘に立つ白髪の男。

赤い外套を身に纏い、その両手に白と黒の中華剣を携え戦う姿。

そして最後は助けた友に裏切られ——死刑台へと続く階段を登る姿。

それでも尚、微笑み続けた男。

場所も姿も、ガラリと変わり、

未だ見たことない土地で私の妹を救う姿。

この男を中心として、増えてゆく出会い。

そしてこの本の記載に、彼の写真や絵等も載ってはいないが、こういう言葉が添えられていた。

——ただ、その男の手には、白と黒の夫妻剣〔干将・莫耶〕が握られていたそうな——

その夜、士郎はいつもの鍛錬をしていた。

だが、今回の鍛錬はあの空間で見た他の自分がやっていた事だ。なぜこの方法を採るかという点、なんとなく今までやってきた鍛錬よりこちらの方が良さそうだと思っただらだ。

「よし、トレス・オン 投影・開始」

士郎は、白と黒の夫妻剣、干将・莫耶をトレースした。

トレース・オフ
「投影・完了……ふう、出来た」

あの俺は、投影の練度を上げるため、毎晩鍛錬を欠かさなかつた。

俺もそれに倣つてこれからの鍛錬をするとしよう。

(そういえば、あの女の言っていた能力……【心象を具現化させる程度の能力】、あの空間では使えたのに、ここでは使えなくなつてるな……どうしてなんだ?)

その答えを、士郎は知らない。

あの気持ちの悪い空間では使えていた2つ目のスイツチの感覚が無い。

(わからないことをいつまでも考えいても仕方ないな……)

鍛錬を終え、投影品を消すと士郎は直ぐに眠りについた。

士郎が鍛錬を開始する少し前。

咲夜は、レミリアから彼はここの敵ではないと言われていたが、やはり気になるよう
で彼の部屋の前へと来ていた。

「……どうしましょうか」

(迂闊に入れば警戒されてしまうだろう。ならば時を止めて扉を少し開けてみるとしま
しょうか)

咲夜は士郎に気づかれまいと時を止めて扉を少しだけ開け、士郎が何をしているのか覗いていた。

時を戻した途端士郎がなにか呟く。

「トレース・オン 投影・開始」

(?…あれは…なにか、青いモヤのようなものが手の中で渦巻いているわね……それに

魔力も感じられる…)

「トレース・オフ 投影・完了——」

(ツ!?!…あれは、武器…しかもかなり使い慣れているみたいね…やはり…気を付けてた方が良さそうね…)

咲夜は士郎に気付かれずに部屋を後にした。

紅魔館で働く事となった衛宮士郎。

今日はあの日彼が紅魔館で働くこと決めた次の日。

「えつと…厨房は…つと、ここだな」

士郎は厨房で朝ご飯の準備を始めようとしていた。

厨房に着く前に勿論迷ったのはここだけの話。

「十六夜は…あ、居たようだな」

近づいてきた土郎に気付いた咲夜が振り返った。

「あ、おはようございませす」

「おはよう…今日の朝ご飯は何なんだ？良かったら手伝うけど…」

「今日の朝ご飯は和食です。お嬢様が和食の気分と仰せられたので」

「そうか。なら、俺が作るよ。得意なんだ、和食」

「そうですか、ではお願いします。実を言うと、和食はあまり得意ではないので助かりませ…」

（毒など入れようものなら…その時は…）

「おう！任せとけ！」

土郎はそう言つて微笑むと咲夜は何故か少しだけ顔が赤くなつた。

（ツ！な、なぜ私がドキドキしてるのよ！私はお嬢様の敵になるかどうか見極めなくてはならないのよ！）

「大丈夫か？顔が赤いようだけど…」

…と土郎は少し心配そうな表情をする。

「え、ええ大丈夫です。お構いなく…」

（ああ、もう！なんでそういう顔するのよ！／／／）

士郎が咲夜を心配する度に咲夜は顔を赤くするばかりであった。

「ほ、本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫です！／＼」

「そ、そうか？ならいいけど…」

（ふう、本当に…相手しづらいですね…それと私はどうしてこうも彼にドキドキしてるのですか!?!／＼）

その間に答えるものは誰もいない。

士郎が冷蔵庫の取っ手に手を掛ける。

「…では、失礼して…」

「ゴクリッ」

（なぜ冷蔵庫を開けるだけでそんな事言うのよ…）

冷蔵庫には綺麗に整頓されていた。中には卵や納豆、肉や魚等色々取り揃えられていた。

「ふむ、やつぱり」

「な、何が？」

「いや、綺麗に整頓されているなと思つてな。やつぱり普段から綺麗な人はこういう見えないところもきちんとしてるもんなんだなと思つて…」

「ツ!!／＼／」

(どうしてこの人はそういう事をこんなにも簡単にいうことが出来るの!?!／＼)

「……………えつと…じゃあ、味噌汁と鮭の塩焼きと…ご飯も炊いてつと…後は玉子焼と?うーん、作りながら考えるか…」

そして士郎は黙々と料理をしていった。

すると突然後から士郎に声をかける人が居た。

「あら、朝ご飯?今日は頼んでおいた和食かしら?」

一度手を止め振り返る士郎

「?…ああ、レミリアか。ああ、そうだよ和食だ」

「私も久しぶりに料理してみようかしら…」

と、言った瞬間咲夜が苦笑いしてどこか諦めの境地であったが、それを見た士郎は何のことか分かっていなかった。

「さあて?手を洗ったし、袖は半袖だから捲ることないし、始めますか!」

結局士郎は気にもとめずレミリアが料理をするのを許してしまったのだった。

そしてしばらくして…

「な、なあ。レミリア?」

「な、何かしら？ 士郎」

「…ハア……」

「な、なによ！ 咲夜！」

「いえ、なんでも……」

士郎達はこの、レミリアが創った謎の物体Xについて議論をしていた。

「まず、レミリア。」

「何かしら？」

「これは…何なんでせう？」

士郎は思わず普段使わないような口調になっていた。

「玉子焼……だった物よ……」

「…だった!？」

「ええ、ありのまま起こったことを話すわ、私は玉子焼を作っていたわ、けどどいつの間にか玉子焼じゃなくなっていた。何を言っているのかわからないと思うけど私も何が起こったのか分からないわ。超能力とか超常現象とかそんなチャチなものじゃないわ。もっと、恐ろしい物の鱗片を味わった気分よ……」

俗に言う、ポルポル現象になっているレミリア。

ジョジョを知っているんですかね？ 一度話したい。一度と言わず何度d「うるさい」

ハイ、でも一度くらい……「黙れ」……「本当に黙ったら話進まないでしょうが!」まったく……レミリアさんはツンd「2度と喋れなく——」ええと!はい!すいません!

コホン。

気を取り直して、続きます。

「……とここでレミリア……」

「な、何よ?」

「料理……したことあるのか?」

「りよ、料理くら——」

「ええ、お嬢様は料理をしたことはありません。」

「ちよ! 咲夜!?! / / / /」

「やっぱりな……俺が違う事をしていたばかりに……俺がレミリアのことを見ていれば……」

「うう…… / / / /」

「うわあああん / / / /」

するとレミリアは見栄を張っていた恥ずかしさに顔を赤くし、泣きながら厨房を後にした。

「あ、レミリア!……行っちゃったな……えっと、大丈夫なのか? レミリアは……」

「……ハア、ハア……お嬢様ア……はっ! え? あ、ええ、いつもあんな感じなので大丈夫です」

咲夜はレミリアの表情を見て高揚していたが、直ぐにいつもの調子に戻った。だが、その表情を見ていた土郎は何とも言えない微妙な表情をしていた。

そして土郎はレミリアの好みを聞いた。

「あ、そうだ。レミリアは玉子焼、甘いのとしょっぱいのどっちがいいんだ？それと、納豆あるみたいだけどそれも付けるか？」

「玉子焼は甘めで納豆は食べるわ」

吸血鬼…納豆…食べられるのか。と思わずにはいられない土郎だった。

そしてご飯の準備もでき、食事の時間となったのだが…

「な、なあ十六夜？」

「何ですか？土郎さん」

「えっと、レミリアが俺も食事を食べる様に、と言ったんだが昨日のノーレッジやこあとか他の人達と一緒にご飯食べないのか？」

「ああ、なるほど。そういうことでしたか。パチュリー様やこあは魔法で食事をする必要がないのです。そして私は従者ですし、門番の美鈴は大体いつも外でご飯を食べてますし、土郎さんは働いてるとはいえ半分はお客様の様な形ですので」

「な、なるほど。そうだったのか」

レミリアは長いテーブルの主席というのか館の主が座る席に座っていた。そして土郎はその隣……とはいえ、テーブルの角を跨いだ席に座って食事をしていた。

終始無言の食事であったが為に土郎はこの空気に押しつぶされそうになっていた。

(……………き、気まずい……………食べ物……………喉を通らない……………)

食事が終わり片付けをしている時、そんな土郎を見ていた咲夜がおにぎりを渡していた。

「土郎さん。」

「な、なんだ？十六夜」

「これを……おにぎりです。先程の食事では何やら物が喉を通らない様でしたのでご用意させていただきました」

「あ、ありがとう。やつぱ、十六夜は気が利くな。ほんと、助かるよ」

炸裂する土郎スマイル。

そしてまた顔を赤くする咲夜。

「ツ！／／／」

(また、またこの笑顔。どうして私はこの笑顔に弱いのかしら／／／)

咲夜は自分この笑顔には勝てないようだ。

その後咲夜は、顔を赤くしながらも仕事をこなしていた。

士郎は朝ごはんの片付けを終わった厨房で今後の仕事内容の説明を受けていた。

「では、仕事の内容は以上となります。しっかりと働いて下さい」

「ああ、わかったよ」

仕事の内容を伝えた後、咲夜は士郎の部屋を出た。

だが、一瞬にして消えたのだ。

「うわっ!?!……消え、た?」

咲夜は時を止め、部屋を出るのはいつもの事。それを知らぬは士郎だけ。

(どうして消えたんだ?……何かしらの能力?瞬間移動的な何か……戦うとなったら厄介だな……)

「さてと、仕事頑張りますか!」

衛宮士郎の仕事内容とは、

朝、掃除から始まる。

(掃除道具は……と。あつた、これだな)

タイムスリップする以前住んでいた家で、士郎は暇さえあれば掃除をしていた。

そんな事から、掃除に関する知識は充分にあつた、それに、他人の真似等技術を模倣することなど得意で、大体の技術はすぐに身についた。

そして掃除も粗方終わると士郎は呟いた。

「ハア……それにしても……広すぎる……」

ただでさえ広い館を咲夜の能力で更に拵げていたのだ、広くない訳ない。

そして終わった頃……

「ふう、終わっ——」

「終わった様ですね」

「うわあっ?!びっくりした」

いきなり後ろから現れたのだ。常に後に気を張っているわけではないが、後ろから人が来れば分かるはずなのだ。

「失礼ですね。まあ、いきなり声をかけた私も悪いのですが」

「す、すまん…」

「いえ、それより、お客様が来たようです」

暁夜の、お客様、という言葉に違和感を感じた。

「お客…様?」

「ええ、私はお嬢様に報告してきますので貴方は門番の美鈴の下に向かってください」

「あ、ああ。わかったよ」

言われるがままに土郎は門へと出向く。

だが、土郎はまず玄関の場所を覚えていない…道を覚えるのはまだ先のようだ。

朝の気温の低い風が吹く中レミリアは日陰になっているテラスで淹れたての紅茶を飲んでいた。

「吸血鬼が朝から起きてるなんてどうかと思うけど…もう慣れてしまったものね…で

も、この風は気持ちがいいわね……」

吸血鬼は朝は寝ていて夜に活動するタイプも居れば、日中に起きていて夜に寝る常人と同じようなタイプも居る。レミリアもそのタイプのようだ。

のんびりしているレミリアの下に音も無く現れる咲夜。それに気付き、話しかけるレミリア。

「どうしたの？ 咲夜…何かあった？」

「お嬢様。先日彼をお呼びしたところ『お嬢様のご命令とあらば即馳せ参じる所存であります』との事で昨日の内に出發したそうです」

「そ、そう…ならないわ。後で出向くと伝えておいて」

「分かりました。ですがお嬢様。彼の事ですから、『お嬢様の足を煩わせるわけにはいきません。私が貴方様の下へ向かいます！』とか言いそうです…」

「あく……じゃ、じゃあ後で来るよう伝えておいて？」
「かしこまりました」

その頃士郎は——道に迷っていた——

案の定、道に迷っていた。それはもう盛大に。

玄関が東にあると言うのに向かっている先は西の方向。構造解析で館の構造を解析

すればいいのだが、士郎は『なんだかプライバシーの侵害みたいで嫌』らしい。だがそろそろ道に迷って5分以上経つ。時計が無いためもしかしたら10分も経っているかもしれない。

何しろ広過ぎて歩いてても歩いてても廊下。扉を開けて部屋に入ってみるがどの部屋も皆同じような配置。館の主が吸血鬼だけあつて窓も少ないと来た。

時間の感覚が狂っているようだ。

「はあ……仕方ないな。よし、トレリス・オン解析・開始」

館の構造を解析するのはいいが、解析する物が大きすぎる。流す魔力量は多くなるが多少は問題ない。最近では魔力を使いすぎて底をついた時から回復した時、以前より魔力量が増えている気がするからだ。

（ふむ、なるほど、俺は反対に向かっていたわけだな……？……？……これは、図書館だよな？それと、この図書館より下の階は何なんだ？後でノーレッヅジにでも聞か……）

そして士郎は玄関に向けて歩き始める。

「えーつと。美鈴さんいますかー？」

たどり着いた門で何やら会話をしている2人がいる。

「ほほう？新しい奴を雇ったのかア。さて？そいつはどんな奴なんだろうなあ？」

「ツ！——え、ええ。お嬢様は新しい人をお雇いになりました。ですが私も未だ話をしていないのでどのようなお方なのかは、分かりかねます」

美鈴は一瞬彼の口調に戸惑ったが士郎はそれに気が付かなかつた。

「ふむ、そこにいるようだなあ？隠れてないででてくればあいいじゃないかあ」

「——ツ!？」

士郎は暎夜の言った『お客様』の言い方でこの者を警戒して隠れていたのが見破られたようだ。

そこで士郎は相手に悟られないよう警戒をしつつ門の前へと出た。

「その新しい奴が俺なんだけど……なんか用か？」

士郎は相手の出方を伺った。

すると彼はこう言った。

「ここで働くことになった新しい奴がいると聞いてなあ？どんな面した奴が働いてんのかと思つてよう——」

彼が言い終わると同時に士郎の目の前から消えた。

「オラア!!」

士郎の死角になる位置から後頭部に目掛けて裏拳が放たれた。だが、士郎はそれをぎりぎりですりで躲した。

「ッ?!——危ないな……もう少して、やられる所だった」

「ほほう? 筋はなかなか良いようだなあ? 一応、自己紹介しとくぜ? 俺はなあ『ウルバルド・オルガ』。ちよつとした、紅魔館この者達の知り合いって所だなあ」

そんな軽い言葉をかけられながらも止まないウルバルドの攻撃。

「クッ!——俺は、士郎……衛宮 士郎……此処で働く事となった者だ!」

続く猛攻を受け流しつつ自己紹介をする士郎。

「反撃、開始だ!——トレス・オン投影・開始!!」

士郎は白兵戦時に有利になる干将・莫耶をトレスした。干将・莫耶は白と黒の中華剣で、二振り揃えて装備しているだけで対魔術・対物理防御が上昇する特性がある。

士郎はこの武器を投影し慣れている為、魔力の燃費も良いのだ。

「ハアアア!!」

一度躲して体勢を立て直すウルバルド。

するとウルバルドも無手では武が悪いと思ったのか武器を取り出した。

それは何処から出したか分からないほど大きなバスターソードであった。

「フンッ!」

それをおおきく振りかぶって士郎に叩きつけようとしている。

士郎は干将・莫耶をクロスさせ、正面から大きなバスターソードを受け止めていた。

「ふむ、躲すだけじゃあなく腕もいいようだなあ?」

「フツ——じゃあ…これはどうだ!」

受け止めていたバスターソードを押し返し、干将・莫耶を投擲する。だが、ウルバルドは躲す。

「ハッ——そんな見え切った攻撃なんざあ効かねえよお!」

そう言つて士郎に斬りかかろうとした時、ウルバルドは何か違和感を感じた。

「?——どうしてだ?今確かにあいつはあの二振りの剣を投げ飛ばしたはずだ。なのに既にもう持っているだ?」

空中で白と黒の中華剣が舞っている。それは、何処か幻想的な弧をえがいていた。

ヒュン!ヒュン!ヒュン!

(そうか!?!この中華剣は引き合う特性があるのか!?)

ウルバルドが気付いた時には少し遅かったようで、ギリギリのところまで躲そうとしたが、左肩を抉っていった。

「グウツ!!」

(どうやら…左腕は上がりそうにないな……)

「どうだ?まさか剣が宙を舞うとは思わなかっただろ?まだやるのか?」

「ああ、まさか引き合う特性があるとはなあ……いや、やめとくよ…お前が更に成長した

時にまた、もう一戦頼むよ」

その時、士郎はウルバルドに違和感を感じた。今までの口調から一変して別人の様になっていたからだ。

「お前、何だかさつきと口調が変わったな」

「ん？ああ、こつちが素なんだよ。改めて自己紹介を、私はウルバルド・オルガ…紅魔館此処で働く者に…ごさいます」

「お、おう…また変わったな…」

と、そこで美鈴が士郎に説明をした。

「この方は多重人格者なのでは？と言うくらいに性格が180度変わるんですよ」

美鈴の説明する時の顔は何処か呆れた表情をしていた。

「士郎さん…とおっしゃいましたね？先程は失礼な物言いで申し訳ありませんでした…」

「い、いや。いいんだ。それよ…怪我は大丈夫か？結構深いと思ったんだが、それとその話し方どうにかしてくれないかな？何だか気まずいというか…これから一緒に働く仲間だし、色々教わる事もあるだろうし…」

「そ、そうですね。では、コホン…じゃあこれから、よろしくな？それと怪我は大丈夫だ。これくらいすぐに治るからな」

するとウルバルドの怪我はみるみるうちに治っていった。

そして、ウルバルドは士郎に握手を求めてきた。

士郎はウルバルドと握手をした。

「あ、ああ。よろしく…」

「はあ…ウルさん、いきなり来るのやめてくださいよー。びつくりしたじゃないですかー」

美鈴はウルバルドに文句を垂れていた。

「いえ？ 咲夜さんから連絡を受けた時に返事をしたと思うのですが…さては、美鈴さん…また寝てましたね？」

昨夜からの連絡にすぐさま返事をして即出発をしたと言うのだ。連絡が行き届いて無くても仕方無いことだろう。

「では、私はお嬢様に挨拶をしますのです…これで…」

「はい。ようこそいらつしやいました。またこれから宜しく御願いますね？」

「ええ、よろしく願います」

「俺もそろそろ仕事に戻るよ」

そして2人は各自の持ち場に戻った。

ウルバルドは一人レミリアに挨拶をしに行くのだった。

ウルバルドと士郎の戦いを観ていた者が2人いた。

「咲夜？^{士郎}彼の事…どう思う？」

「……今回はそこまで長くなかったのでよく分かりませんが…彼は、まだ弱い。ですが、鍛えたらどこまで伸びるのか…」

「ええ、どこまで伸びるのかしらね……フフフ…ほんと、これからが楽しみだわ……」

2階の窓から顔を覗かせる吸血鬼が一人……

士郎はどこまで強くなれるのか……

楽しみにレミリアは口角が釣り上がっていた。

第八話 紅魔館は今日も平和

あれから料理の分担は咲夜と俺の交代制ということになった。

レミリアに料理を作らせたなら紅魔館が崩壊してしまうな……もう二度と……いや、今度和食料理を十六夜とレミリアに一から教えるとしよう。そうしたらレミリアは、間違ってもパッケージに油と書いてあるだけで洗剤を入れることはなくなるだろう（後からどうやって作ったか聞いた）。

とどうか何故簡単な物を作ろうとするだけで謎の物体Xに昇華させられるんだ？と言うか昇格？降格？

桜だってあそこまでじゃなかったぞ!?

ともあれ……

——まずは簡単な玉子焼きからかな——

おっと、話が逸れてしまったな。

あの後俺はウルさん——オルガと呼ばれるのはあまり好きじゃないからウルとでも呼んでほしい——が紅魔館の裏の仕事をこなしている人物だということを知った。

何でも、仕事柄ほかの組織との関わり等を持つている為色々な性格になれるという事で俺はまんまと騙され敵と認識してしまった。あれは本当にずるいと思う。

何故なら初対面の人には普通な社交的な性格で、自分の主等親しい人物なら執事みたいな性格に、更に敵等を前にした時は、凄く威圧的な性格になる。あの、俺と戦った時の性格が良い例だろう。

あの人は強い。あの時はおそらく俺の力がどんなものなのか見るためだったのだろう。俺が見ても手加減されているのが分かった。

俺は…強くならなくちゃな。

さてと、掃除も終わったことだ。

次は洗濯だな…よし、さっさと終わらせるとしようか。

えっと…洗濯……だけど…俺がやっていいのか……？

ま、まあ下着とかじゃなければ大丈夫かな……？

そんな思いも虚しく洗濯場にはやはり下着と普段着等が均等に積まれてあった。

はあ…やっぱりな…どうしよう…あ、そうだ十六夜に下着を頼めばいいのか。

ところで十六夜はどこに？

レミリアも何も無い所に呼んでいたから呼べば普通に来るのか？まあいいや、呼んで

みるとしよう。

「すまん！十六夜、洗濯場に来てくれ！」

「そんなに大声出さなくても聞こえてますよ」

「うおわあ！」

いきなり現れると思つて身構えていたら普通に扉から来て驚いてしまった。どうやらすぐそこに居たみたいだ。

「普通に扉から入つても驚かれるとは…私はどう現れたらいいのです？」

「いや、すまない。いきなり現れると思つてたからな…」

「まあいいです。で、何の御用ですか？」

「え、ああ。洗濯で普段着とかだけでもあー——」

そう口では言いながら俺は右手で下着を掴んでしまっていた。ピンク色のフリルのついた可愛らしい下着だった。これは誰の下着だろうか…あ、この下着解れてるな…で、そんなこと今はどうでもいい！

そして俺は十六夜に顔を向ける。

「あ…」

十六夜は顔を赤くしながら怒鳴っていた。

「あ、貴方は何をしてるんですかあ!？」

「いや、まて——」

「問答無用ですツ!!!」

いつの間にか右手に持っていた下着は無くなっていたが、扉の方へ吹き飛ばされてしまった。

あ、ヤバ——何だか、気が——遠く——

そして俺は気絶してしまった。

「全く、な、何をしてるんですか。この人は?！」

(くう……よくも勝手に人の下着を……とりあえず部屋に運びましょうか……はあ……)

どうやらこの下着は咲夜の下着だったようだ。

ピンク色のフリルのついた、かわ「それ以上喋らないでください」はい、女性は大抵誰でも自分の下着を異性が持っていたらキレるであろう。「ピンク色のフリルまでは言ってもいいんだ……」

そして咲夜は士郎を部屋へと運び込んだ。

……知らない天井だ。

なんて言うことはなく今朝見た天井だった。

こんなぼけている場合じゃなくて、俺は何故自分の部屋で寝てるんだ？

どうやら士郎は先ほどの記憶が抜けているようだ。

そこに咲夜が来た。

「おはようございませす……と言ってもそろそろお昼ですけどね……ちなみに先程のことは覚えてますでしょうか？」

……？……俺はあの時何をしていたんだ？

「先程のこと？」

確か洗濯がどうのこうので……覚えてないふりをしよう……

俺は十六夜にバレないように返した。

「い、いや。すまない、覚えてないな。もし俺がなにかしてたら謝るよ。悪かった……俺は途中から顔を逸らしながら喋っていた。」

「覚えてますね？」

「うぐっ！……本当に悪かった……」

「次からは気を付けてくださいよ？」

顔は優しく微笑んでいるのだが、目が笑っていない……気を付けなくては……

「ああ、気を付けるよ……」

すると十六夜は、「はあ……」と、肩の力を抜いて俺を許してくれたみたいだった。

だが、何処か警戒している様な雰囲気は抜けていなかった。

「洗濯の事ですが、自分の服は自分で洗うということにしましょう」

「あ、ああ。そうだな、そうしよう」

俺はその提案にすぐさま乗っていた。

次にすることだが……ふむ、とりあえずは今のところ休憩だな。

そうだ、ノーレッジのところできっきの地下の話聞いてみるとしよう。

そして俺は地下へと向かった。

やはり、ここの図書館は本が多いな…

それに、埃とかもかなりあるし…あ、そうだ。聞きたいことと兼ねてここの掃除もしようか。

パチュリーは、この図書館の開けた場所の書齋のような所で本を読んでいた。

「なあ、ノーレッツジ」

「ん？来てたのね…何か用？」

返事はしたものの相変わらず本は読んだままだ。

「…まあ、な。あ、ところでさ」

「なにかしら？」

「こんな埃の多いところで籠ってて身体の調子が悪かったりしないか？」

「ええ、まあ大丈夫よ。でもまあ喘息くらいかしらね。魔法で治らないからどうしようもないのよ」

「ふむ、喘息か…もしかしたら治る…たまでも行かないかもしれないけど改善されるかもしれないぞ？」

するとパチュリーは興味を示したようで本を読むのを止めた。

「喘息が治るの!?!」

「いや、まあ改善されるかもしれないぞ？」

身を乗り出して聴きに來ている。

顔が目と鼻の先にあつて士郎との距離は息が掛かる程だ。

「あ、あの。ノーレッジさん？近い、近いから！」

慌てて飛び退く士郎。だが、飛び退いても距離を詰めてくるパチュリー。その顔には恥ずかしさから顔を赤らめていながらも、自分の喘息が治る可能性の興奮やら何やらでその事は半分どうでも良くなっている。

「あ、いや／＼そ、そんな事より喘息治るの？どうなの？今まで魔法で治らなかつたからどんなことをすれば治るのかすごく気になるのよ」

パチュリーは食事をしない。どういう原理で食事をしなくても大丈夫な身体になっているかなどは知らないが、魔法で食事をしなくても生きていける身体になっているようだ。もう何年も食事をしていないらしい。

かなり痩せ細っている。いくら食事が必要ないからと言っても不健康には変わりないだろう。

「簡単な事だよ。食事だ」

「食事？」

「ああ、食事。ものを食べることだ」

「いや、そりゃあ分かるわよ」

それもそうだろう。パチュリーは食事のことを知らぬわけではない。食事をしないだけだ。

それに今まで、魔法で治らなかつた喘息が食事によつて治るかもしれないと言うことで鳩が豆鉄砲を喰らつたような顔をしていただけだ。

「よ、よし。じゃあ、少し離れてくれないか？」

「あ……………／＼／＼」

幾ら聴くためとはいえ、前傾姿勢で凄く顔が近い。

流石に2人とも恥ずかしそうにしている。

そこに本棚の角から現れる霧^ム困^ト気^ブの読^レめ^イない^カ奴。

「パチュリーさまー、この本つてどこに置くんでしたっけ……………お、お邪魔しましたあ!?!」

士郎の上に覆い被さる様に転んでいる姿をこあに見られてしまった。

「あ、待つて!?!こあ? 誤解よ!」

「そ、そうだぞ。こあさん!?!ま、待つてくれ!」

慌てて追い掛ける士郎とパチュリー。

だが、パチュリーは元より動かない。

故に体力も無く、追いかける力がない。

そして士郎は気が動転している為、自身を強化して速く走ることを忘れている。隣ではパチュリーがへばっている為更に動けなくなっている。

「むきゆく……」

「あ、おい。大丈夫か!? ノーレッツ。あ、くそ! 待て!」

かくして、こゑを逃してしまつた2人はこの後紅魔館の者達に質問攻めに会う。

その時のレミリアの台詞がこうである。

「貴方達…ほんとにそういう話が好きなのね……」

「そういうお嬢様も気になるのでは?」

「う、煩い。黙つてなさい……」

「聴いてきましようか?」

「いいの?」

「え?」

「え?…あつ……うう……」

紅魔館の主は一人頭を抱えていた。

そしてそのメイドはその姿に忠誠心鼻血を出していた。

それを偶然目撃した士郎は思った。

何この状況……と。

ここは幻想的な大地、花々の香りが漂い、妖精が飛び交う所、前人未踏の島に立つ者が一人。

その名は花の魔術師マリーリン。

彼は人が創り出すストーリーを好む。

その中でもハッピーエンドというものを好む。

人が創り出すストーリーとは、

小説等のようなものではなく人の人生等の事を言う。

一人一人の人生。産まれ、成長し、いずれ働き、その最中で最愛の人物と結ばれ人としての生を終える様な物。

例えば、貧困地で苦しむ子供たちの為、自らを犠牲にする様な物。

はたまた仲間を増やし、悪の化身を打ち倒し、囚われの姫を助け出す様な物。

様々なストーリーがある。

そんなストーリーでも、自分が力を貸すことでその物語はどう変わるのか、どうい

風に進むのかを楽しむ。

一滴の雫を垂らして、波紋の広がり方を観て楽しんでる。

だが、彼はあまり干渉しすぎることを好まない。

それ以前に、彼は関わり過ぎることはまず無いだろう。ブリテンのウーサー王が死去し、後続の王の選定の時だ、彼は選定の剣『カリバーン』で彼女を王へと推した。その時も彼が干渉したのはその時くらいなもので、大きく関わったことは無かったからだ。

彼は恐らく、深く関わりすぎること恐れているのではないだろうか。それも無意識に。深く関われば関わる程別れは辛く、寂しい。いつの日かその悲しさは彼自身を滅ぼしてしまうのではないだろうか。

あくまで、自分は傍観者。

それこそ、世界の危機にもならなければ、彼は塔での生活から出てくることは無いだろう。

だが、今回は彼女と彼の為赴いた。

深く関わり過ぎず、別れは――

——誰にも告げる事なく——

そんな彼の元にまた、客が現れたようだ。

「あら、何か邪魔をしたかしら？」

どうやら彼がどこか遠くを見ているところを邪魔したと思つたようだ。

「いいや？そろそろ来る頃だと思つていたよ。ところで今度はどんな要件なんだい？」
「頼まれていた事が終わった。ということをお伝えにね……」

「そうかい……苦勞を掛けたね」

「フン、思つてもないくせに……」

「でも、言わないよりマシだろ？」

「まあ、それもそうね」

彼、花の魔術師マーリンは人と夢魔の混血児である。

故に感情などは人の夢から持つてきた物であり、自分の性格ではなく、人の夢等から

貰ったものである。

重要なときに居られない非人間だと彼は自分の事を言う。

「今日は聴きたいことがあつて来たのよ」

「聴きたいこと？」

「ええ、彼女の人生は尊いと思つたのよね？」

「ああ——なのはどうしてこんな事をするのか——かい？」

「ええ、そうね。彼女の人生は尊いと思つて貴方は少なからずある罪悪感でここに籠つているのよね？」

「ああ、確かにその通り——なのかな……彼女には悪い事をしたと少なからず思つている。それに前も言つた様に王としてじゃなく少女として『アルトリアとしての人生』はどうだつたのだろうか……そう思つてね。それも込みで尊いと思ひもする、けども好きな人と一緒に居られないのは悲しい物なのじゃないかとも思う」

それに続けて彼は言う。

「このままでもいいかと思つた。だけど一度は寄り添つた仲だ。別れたまま……会えるかもしれないが、もう二度と会えないかもしれない。そうだね、彼女の幸せそうな姿を見てみたいんだよ」

と、彼は言い少し悲しげな表情をする。

「ふうん。なるほどね…尊く美しいストーリーと楽しいな幸せそうなストーリーと、どちらも見てみたい。と言ったところかしら？」

「まあそうなるかな…決して…彼女の生き方を否定したい訳じゃない。むしろ肯定さ。だけどね、やっぱりハッピーエンドがいいと思うんだ。ご褒美…かどわか分らないけど…それは、押し付けるものだろ？今回は彼と彼女にね」

すると彼女はまた面白い物を見付けたとばかりに口角を釣り上げて笑う。

「そう…：用事はそれだけよ。では、もう私は帰るとするわ…」

「そうかい。じゃあ、帰りは気を付けてね…と言つてもそれで帰るなら別に心配する必要も無いかな…」

すると彼女は何も無い空間に裂け目を作った。そしてそこに入り、言う。

「ええ、まあね。でもまあありがとう、と言つておくわ。また何かあれば来るはずよ。それまでじゃあね」

「ああ、また会おう。次は長めに話がしたいものだね」

すると彼女は微笑んで言う。

「フフフ、貴方と話をしたら口説かれそうね。じゃあね」

「いやあ、別にそんなつもりは無いんだけどね。じゃあ」

そして彼女はその空間の裂け目に消えてゆく。

空間の中に、笑みを浮かべる女性が一人。

「彼は見ていて面白いわね。では、私はこの状況を楽しむとしましょうか」
彼女は一人この物語を楽しもうとしていた…。